

すぐれた実践研究には共通してどんな特徴があるか

— 22年度最優秀論文を中心に —

審査委員長
菊池 龍三郎

すぐれた実践研究とはどのようなものか、どういうところが違うか、これは誰にとっても関心のある問題です。審査に関わっていると、すぐれた実践研究には、論文の書き方が上手か上手でないかということ以前に、いくつかのすぐれた共通点があるように思います。このことを今年度の最優秀論文を中心に取り上げてみたいと思います。

1. 問題意識へのこだわりの強さ

総じて受賞された研究論文は、自分あるいは学校がいま児童・生徒の指導面でどのような問題に直面しているかが読み手にはっきりわかります。その問題にアプローチするにはどのような切り口から取り組んだらよいのか、ということ具体的な課題としてつかんでいることが伝わってきます。書き手である教師がいま何で困っているのか、何をどうしたいのかがはっきり読み取れます。読み始めてすぐにこういう印象を持てる研究は、多分論文を書くもとなっている教育実践自体がはっきりした問題意識、課題意識で貫かれているのだと思います。逆に何を指しているのかがはっきりしない研究は、全体として印象が弱い感じがしてしまいます。印象が弱い原因は、問題意識から具体的な課題意識へとねらいを絞り、そこからさらに研究の見通し（仮説）を導き出していくプロセス全体が簡単過ぎて、食い足りない感じがするからだと思います。研究のスタートとしての問題意識自体の密度が薄いこと、さらに研究計画に従って実践し考察を加えていく過程で、研究のねらいが一貫して意識されていないこと、ねらいや見通しにこだわり続ける姿勢が弱いことなどが原因だと思います。その点で今年度受賞された研究はいずれも問題意識、課題意識に粘り強くこだわり続けた密度の濃い研究であったと評価されます。

2. 現実の児童の姿や行動から指導上の具体的な課題を導き出す

松本仁子教諭（下妻市立騰波ノ江小学校）の研究「知的障害特別支援学級における伝え合う力を育てる学習指導の在り方～読書へのアニメーションによる読書活動や言葉遊び、日記指導等を通して～」は、特別支援学級の児童を対象とする研究ですが、普通学級での豊富な実践の跡が窺われ、そこでなされた様々な工夫は普通学級の指導にも十分に当てはまる普遍性を有しています。

この研究において児童達が示す指導上の問題は、例えばA児では「相手の言う意味が分からないためかオウム返しが多い」、B児では「本が好きでスラスラ読めるが、内容を読み取ることが難しく、また人前で話せない」、またC児の場合は「聞き慣れない言葉に出会うと消極的になる」などとしてとらえられています。これらの原因を教諭は、児童達のコミュニケーション能力の力が弱いためであると簡単に片付けずに、児童達が示すひとつひとつの具体的な行動の表れを深掘りする中で明らかにしようと努力しています。そこから、例えば指導上の課題を、「語彙が少ないために友達とトラブルを起こしがち」、「人の話を最後まで集中して聴いたり、場面を想像しながら読んだりすることが不得手」、「平仮名が読めない」などの共通の課題を抱えていることとして絞り込んでいきます。普通はそこでコミュニケーション力の育成などと聞くと、例えばすぐに既製の定型的なプログラムなどの手法を機械的に当てはめて話し合いなどをやらせようとしがちです。しかし、この場合、「伝え合う力」は技術的なレベルの問題としてではなく、それ以前に、そもそも「相手への意識」が弱いことに起因する「伝える力」と「聴く力」の問

題として、それをどう育成するか課題としてとらえ直され、さらにそれを促す環境設定・場面設定の課題として発展的に具体化されています。ひとつには「書く力」「読む力」「話す力」「聴く力」などの表現の基礎となる「語彙力」の獲得が重要と考え、これを何とかすれば「話せた」という喜びを経験し、表現する意欲が高まり、そこから伝え合う力も育つはずであるという研究の見通しを立てています。そこまで問題意識を深掘りしていくプロセスが先ず大事なのではないか。この道筋がしっかり読み取れる研究論文は説得力があり、かつ読み手にとっても有益ではないかと考えています。

松本教諭は、知的障害を持つ児童達の「伝え合う力」を学習指導によってどう育てるかの課題に取り組む中で、「読書へのアニメーション」の有効性に着目します。そして読書活動や言葉遊び、日記指導などアニメーションが含む多彩な活動を通して、児童達が自ずと「伝え合わざるを得ない」状況や関係性を創り出すことに成功しているように思います。学習指導における適切な方法・形態を選び取っていくためには、それに先だって、先ずこうした問題意識の深掘りが不可欠ではないかと考えています。

3. 学校全体で研究に取り組む場合のマネジメントのあり方

このことは、もうひとつの最優秀論文である鈴木洋行校長（東海村立白方小学校）を代表とする共同研究「自分の考えを持ち、進んで表現できる児童の育成～算数科における「書く」「話す」「読む」活動における支援を通して～」についても明らかです。この学校では、自分の考えを伝えられない児童について、その原因を多角的にしかも学校全体で明らかにしようとしています。そして原因は自分の考えを持っていないことと、表現する力が不足していることに起因するのではないかと結論に達します。この結論自体はありふれたものに聞こえます。しかし白方小学校の場合、結論に至る道筋は多くの具体的な事実で裏付けられ、すべての先生方が納得する形で丁寧に進められているという印象を持ちました。

この白方小学校の共同研究は学校全体で算数科の実践の改善に取り組んだものですが、他校の参考になると思われるのは、関係する先生方全体の問題意識のレベルとベクトルをどう合わせながら共同研究を進めるかという共同研究のマネジメントのあり方に関してです。

他の多くの学校と同じくこの学校でも、なぜ「学び合い」が成立しないのかという問いかけから始めています。そして、それは人に自分の考えを伝えられないからであり、そうした児童には、自分の考えを持っていないことと、表現する力が不足しているという共通点があると絞り込んでいきます。大事なことは事実を踏まえながらみんなですら十分に話し合った上で納得していることです。結論だけ聞けば簡単なようですが、実際のプロセスは着実に説得力があります。これは学校の中での研究討議が常に具体的な事実に沿って展開されていることを示しています。この研究は算数科での取り組みですが、いわば実践研究を進めていく「方法的意識」とでも言うべきものがかなりのところ先生方に共有されていることが窺える研究です。だからこそ、児童達が理由や根拠のある考えを書いたり、伝えたり、筋道を立てて説明したりできる指導として取り組んでいる「語り始めの言葉教室」や「目指せ発表名人」などの工夫がさらに意義深く思われるのだと思います。

繰り返しになりますが、ここでは学校全体、さらに先生方ひとりひとりの問題意識のレベルと研究の方向のベクトルをどう合わせながら研究を進めていくかという「方法意識」を先生方が持ち続け、言葉や概念が上滑りしないように空回りしないように心がけているように思われます。研究目標を常に児童の行動レベル、行動の変化のレベルで具体的に押さえようと心がけた研究であることの一例を例えば、児童が数学的に考えている状態をとらえ評価するための資料づくりに当たって、児童の行動の姿で具体的な分析的に記述しようとしていることに見ることができると思います。

総じて、最優秀賞に限らず、優秀賞、優良賞を受賞された研究論文に共通するのは、「何が問題なのか、そしてその解決にはどうすればよいか」という研究の最初のポイントがしっかりした研究でした。そこから窺えるのは、先生方が日頃から熱心に研究・研修を積み重ね、思索を深めながら実践の改善を期して試行錯誤しながら頑張っている姿でした。